

奈良の都へ続く「小川津」

今から約1300年前の奈良に都があった時代、高島市域では、宮殿や寺院などの造営・維持をするための材木を調達する山が数多く開発されました。東大寺正倉院に伝わる正倉院文書には、東大寺の造営を担当する役所である造東大寺司が、材木を伐採するために、全国の山に山作所を設けていたという記録があり、滋賀県内では、その場所として甲賀(甲賀市・田上(大津市))そして高島の地名があがっています。

さらに、正倉院文書の中に残る天平宝字6年(762)の材木の運搬に関する記録には、高島の山から切り出された材木が「小川津」という地から、宇治(京都府宇治市)を経て、泉津(京都府木津市)に運ばれていったことが書かれています。

滋賀県内の山作所は、比較的大きな川の上流にあたる山地に設定されていることが多いことから、恐らく、山で伐採された材木は、

に組み、川の流れを使って津と呼ばれる港に集められ、さらに湖上水運を使って、材木を大量に必要とする奈良の都などに送られていったと考えられます。高島の「小川津」も、そうした場合の材木の集積地であり、同時に都へ通じる重要な玄関口の一つであったと思

われます。ただ、正倉院文書に登場する「小川津」が、市内のどの辺りにあったかは分かっていません。その地名から、現在の安曇川町上小川・下小川付近、または朽木小川付近ではないかと推定されています。

で切り出した材木を集積する港の適地であると考えられます。さらに、朽木小川は、日本海と奈良の都を結ぶ街道の最短ルート上にある地で、早くから大陸からの物資や渡来人が行き交うこともあった場所と考えられます。

こうしたことから、「小川津」という奈良の都へ続く港が朽木小川にあったという説も否定することはできません。

文化財課

☎(32) 4467



「小川津」推定地の1つ、朽木小川

と、湖に接した集落ではなく、港があった場所とは考えにくいですが、かつては上小川・下小川周辺にまで内湖が広がっていたこと、また鴨川上流の山地で切り出された材木は、その下流に位置する上小川・下小川付近に集積されたとも考えられることから、「小川津」推定地の一つになっています。

また、朽木小川は、安曇川に続く針畑川沿いに位置する集落で、この地も、上流の山地

編集感

GWに、珍しい祭といわれる安曇川町の足半(あしな)祭に行き、下古賀地区の祭列に同行しました。上古賀、下古賀の境目まで来ると、両地区の代表が前に出てにらみ合い。しばらく対峙した後、お互いに土下座されます。この場面は、かつての境界争いの出遭いの場面を表したものだとか。祭を通して地域の歴史を感じました。市内には地域特有のさまざまな祭があり興味深いですね。(S)



広報たかしま

平成25年

6

月号
No.161

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒505-1031 滋賀県高島市新旭町北畑5の番地

☎0740(25)8000(代)

http://www.city.takashima.shiga.jp

✉t:info@city.takashima.shiga.jp

